昭和４７年５月１５日発行・第３０号（昭和４５年９月４日第三種郵便物認可）

リベルテール

５月号

Le Libertaire VoL,Ⅲ, No 6

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月　四日第三種郵便物認可
定価一〇〇円（送料共）

読者への特別サービス（五月末迄、以後は定価通り）

本会で萩原晋太郎著『永久革命への騎士・高尾平兵衛』を刊行！
五月末迄に送金されれば送料共特価七五〇円で提供（四月末刊）
口絵写真八頁、本文二二〇頁B六判活版限定千部（定価〒共千円）
内容は何れ紹介するが、大正の激動期に社会運動の真髄を貫いて、右翼の手に倒れた革命児の、波瀾万丈の一大ドキュメントである。
幸徳や大杉の資料は多いが、当時労働者に大きな影響を与えた高尾の言行を発掘したのは本書が初めてである。貴重な運動資料だ。
目次の大要を以下に記す。ふるって申込を願う。

第一部　揺籃の諫早　1風雲児誕生　2系図　3諫早の風物詩　他
第二部　放浪の青春　1大阪でもまれる　2上京そして大陸へ出奔
第三部　激動の晩年　1夜明け（大逆事件、近代思想、平民新聞）
2北風会での出あい　3大日本鉱山労働同盟会　4法廷裸体事件
5平公の手紙　6大杉とも別れて（『労働運動』『労働者』、大杉栄との論争、彼の思想）　7再び足尾争議に　8ロシア飢饉救済運動　9大庭柯公事件　10極東民族大会　11密行中に女の世話
12第一次共産党　13戦線同盟　14スト破りから詫状をとる
第四部　反逆児の最後　1運命の朝　2虫の知らせか　3その後の追跡　4社会葬第一号　5鎮魂譜　6後日譚（遺骨諫早に帰る、殺人弁護士と長山のその後）
年譜、註解、あとがき、（序文は平岩巌氏による）

目　次

近代社会への
アナーキズムの適応性　サム・ドルゴフ　1
海と島と船　菅　輝生　13
たそがれ日記　山鹿泰治　16
野　火　17

近代社会へのアナーキズムの適応性

サム・ドルゴフ

アナーキズムは社会規律の否認ではなく、むしろ人道主義的責任を引受けることである。
ショロム・アッシュ

筆者はインダストリアル・ワーカー（IWW）で、サム・ワイナーの名で、書き続けていた。今度リバータリアン・アナリシスの第四号に本名で初めてこれを発表した。IWWはギルド・ソーシャリズムがサンジカリズムのイギリス版であるように、アメリカにおけるサンジカリズムである。しかしサンジカリズムの模倣ではなく、別個に独自に発達したのが、サンジカリズムと同様なものとして現われたのである。日本でもサンジカリズムが紹介される以前に、労働者たちが自発性をもって組合活動をしたことがあった。自主的に自由、平等が求められるときに、世界中のどこでも同じような形の運動が行なわれることになる。自由・平等・友愛が普遍的真理であり、人類は一つだということだろう。その間の小異として歴史的、地理的、社会的な民族の特異性が現われる。

この一文はアメリカ的環境から生れたにせよ、常識的・説得的で多くの示唆を含んでいる。（三浦）

ブルジョア的ネオ＝アナーキズム

近代の産業化された社会に対するアナーキズム思想の適応性について有意義な検討をするには、まず第一に、論点を明確にするために、今日の『ネオ＝アナーキズム』とプルードン、バクーニン、クロポトキン、マラテスタおよびその継承者たちの古典的アナーキズムとの間の差異を概観しなければならない。アナーキズムについて近代の著作家たちによって提示された思想の平凡で表面的な性質には、皆がほとんど例外なく驚かされる。新鮮な明察を表現しないで、ユートピア的思想を繰返しているのである。アナーキスト運動ははるか以前にこの思想から離脱しており、現代のますます複雑化して行く社会の

問題には全面的に適合しないものとして拒絶しているものである。

有名なアナーキストの著作家ルイジ・ファブリが五十年前に『アナーキズムの中のブルジョア的影響』と折紙をつけた多くの思想がふたたび流布している。たとえばキングスレー・ワイドマーの文章『アナーキズムが右翼・左翼、いたるところで復活した』というのがある。過去の同様なブルジョア的活動のようにワイドマーは次のように正確に指摘している。

「現代のアナーキズムの復活は……主として個人主義者、ユートピアン、その他の非労働階級のアナーキズムの様相を〈基礎とした〉異分子的な中等階級知識人、学生およびその他の周辺群から来ている」。（ネーション紙一九七〇年十一月十六日号）―本章を通じて〈〉内のそして強調されているものは編集者によるもの―

古いブルジョア・アナーキストたちと同様に、ワイドマーもまた、実際にアナーキズムと自由社会主義との間のつながりを否定し、『純粋に社会主義を構成するものとしてアナーキズム』を見ることを排拒する。

その他の典型的なブルジョア的アナーキズムの特徴は「現実逃避主義」―もし十分な数の人々が体制外に集団し、コミュン……やその他の典型的な機構の中でアナーキストらしく生活するとしたら、体制は次第に掘り崩されるだろうといった希望……。（ワイドマー）

「ネチャーエフ主義」―ネチャーエフの道徳無視の伝にしたがった陰謀、非情、暴力のロマンチックな美化。「ボヘミアン主義」―全面的無責任。自己の絵画的『典型』すなわち、露出趣味、あらゆる形式の組織あるいは自律の拒否といったものに没入し切る。

「反社会的個人主義」―『もっとも反社会的な形式の個人的反抗を理想化する』衝動。（ファブリ）

マラテスタは書いている。「抑圧を許さないこと、自由であろうとし、その性格を極限まで展開させようとする願望がアナーキストであるために十分なのではない。無制限な自由へのこの熱望も、もし人類の愛によって、そして万人が等しく自由を享受しなければならないという願望によって調和されなかったとしたら、やがて搾取者や暴君になる……反乱者をつくりだけだけのことである……」。（マラテスタ著、生活と思想、フリードム社版、ロンドン、一九六五年、第24ページ）

さらに他のネオ・アナーキストたちは『行動のための行動』といった妄想にとりつかれている。イタリア・アナーキズムの最大の歴史家の一人、ピエル・カルロ・マシニは、彼等にとっては〈自然発生性〉が、あらゆる問

題をひとりでに解決する万能薬だと書いている。いかなる理論的または実際的な準備も必要としないのだ。〈すぐそこらにころがっている革命〉では、リベルテールとわれわれの宿敵である〈マルクス＝レーニン主義者〉のような権力主義群との間の根本的な差異は奇妙にも消え失せるだろう。

マシニは考える。「まったく逆説的なことだが、真実に近代的なアナーキストは白髪の人々であり、バクーニンやマラテスタの教える所にしたがう人々で、イタリアでもスペインでも〈同様にロシアでも〉、革命というものがいかに恐るべきものであるかを、いたましい、みずからの参加を通じて知った人々である……」。（友への手紙から引用、日付なし）

学者たちが言っている多くの立派なことを軽視するつもりはないし、また戦争、人種差別、そしてとてつもない犯罪である〈体制〉の虚偽の価値に対しての若い叛逆者たちのすばらしい斗争を過小評価するつもりもない。―こうした斗争が長く眠っていた急進的運の復活の火花だったのだ。しかし彼等はアナーキズムのマイナスの面を強調したり、建設的な原理を曲解している。バクーニンや古典的なアナーキストたちは、いつでも建設的な考え方や行動の必要を強調していた。

一八四八年の革命活動（二月革命）は、〈豊かな直感〉を持っていた。否定的な理論的概念は、特権に対する闘争に全面的な正当化を与えるものだった。けれども古いブルジョア的機構の廃墟の上に新しい組織を建設することを可能にするために必要だったはずの積極的で実際的な理想が完全に欠けていたのだ……。（連合主義・社会主義・反神学主義）

こうした堅実な基礎が欠けていては、こうした活動は事実上崩壊しなければならない。

アナーキズム思想の歪曲

ジョージ・ウッドコックの「アナーキズム」、そしてホロヴィッツとジョルのどちらも「アナーキストたち」という書名の二つの本、これらの最近の著作はアナーキストたちが牧歌的な過去に帰って行こうとする古風な、幻想的なあこがれに生きているといった神話を存続させている。ウッドコックによれば、『……バクーニンやその後継者たちから出たアナーキズムの活動は死んでいる……』。古典的なアナーキズムの基礎的な原則である、権力の経済的、政治的な集中排除、個人および地域的自治、産業の自治管理（労働者の管理）および連合主義は、「政治的、経済的集中に向って進む世界的な潮流

に対して〈逆行する〉時代おくれの形式の組織である。……近代の社会革命は実際にこの集中化の過程であった。あらゆる科学的、技術的進歩が寄与したのはこの方向においてであった。〈潮流は反対の方向であって〉……アナーキズムの運動は国家あるいは資本主義経済に対して、それに代るべきものを提示できなかったのである……。（アナーキズム、クリーヴランド市ワールド・パブリッシング発行、一九六二年版四六九、四七三ページ）

社会の再建に関する膨大なリベルテール文献について貧弱な知識しか持たないにしても、学者たちがどうしてこんな不条理な結論に到達し得たのか、理解に苦しむのである!!いちじるしい例外はフランスの社会学者で歴史家のダニエル・ゲランである。そのすぐれた小著「アナーキズム」は最近ノーム・チョムスキーの序文付きで英訳された（ニューヨーク・マンスリー・レヴュー・プレス社）。ゲランはアナーキズムの建設面について思考を集中している。欠点ももちろんありはする。〈彼はクロポトキンの思想を過小評価して、スチルナーの思想を大評価している〉。けれどもこの本はこの問題に関して最良の小著である。ゲランは最近の歴史家たち、特にジャン・メトロン、ウッドコックおよびジョルの所論をハッキリと攻撃して、結論している。彼等は「……アナーキズムのイメージは真実ではない。バクーニンの諸著の中に、もっとも完成された表現を見出す建設的アナーキズムは組織に、自律に、統合に、強圧的でなく連合主義の集中に依存する。大規模産業、近代技術、近代プロレタリア、真実の国際主義を物語っている。……近代世界においては物質的、知性的、そして道徳的利害は国民のあらゆる部分に、そして他の諸国民の間にも、真実のそして堅固な結合をつくり出した。そしてこの結合はあらゆる国家よりも長い生命をもっているのだ……。（ラナルシズム、パリ、ガリマル社、一九六五年版：一八〇―一八一ページ）

古典的アナーキズムが近代社会に適用できる範囲を査定するためには、まず建設的な原則の主要なものを簡単に概括する必要がある。

複雑な社会はアナーキズムを必要とする。

アナーキストが社会生活の複雑性を無視すると考えるのは間違った考えである。その反対に古典的アナーキスト達は、いつでも社会的、個人的生活の豊かな多面性と多様性を反映する自然的複雑性のためにする類別を偽装する『単純さ』といった種類のものを拒否してきた。サ

イバネティック数学のジョン・B・マクエウアンはサイバネティックにアナーキズムが適切であることを書いて、次のように説明する。

「リベルテール社会主義者〈非個人主義的アナーキストの同義語〉、特にクロポトキンとランダウアーは、複雑な社会構造を、早くから権力主義的圧制とは別個の相関的活動と相互扶助の多くの構造を含めて、変化する関係の複雑な網状組織として、把握したことを示している。彼等がその社会組織の理論を発展させたのは、こうした背景によるものであった」。（アナーキー第25号、ロンドン、一九二五年三月）。

その先駆者であるブルードンやバクーニンと同様に、クロポトキンは、社会生活の非常な複雑さが、労働者による産業の非集中化と自治管理を要求したのであるという思想を練りあげた。イングランドとスコットランドの経済生活の研究から、彼は次のように結論した。

「……生産と交換は、もし労働者たちが自分たち自身でその組合を通じて、産業の各部門でそれをやらなかったとしたら、いかなる政府でも〈わずらわしい、非能率的な官僚専政制をつくらない限り〉生産を組織することはできなかったはずである。というのは、すべての生産において……政府が予見することもできないような……無数の困難が毎日のように起ったからである。問題に取組んだ数千人の知性の努力だけが、新しい社会的システムの開発に協力し、無数の地方的需要に対する解決を見出すことができたのである……。（革命的パンフレット集、ニューヨーク、ヴァンガード・プレス社版、一九二七年七六―七七ページ。ブルードンの立場も同様であった。『……思想の進歩と利害の複雑性を通じて社会は国家を回避せざるを得ない……』。）

非集中化と自治は社会を小さな、孤立した、経済的自給自足群に細分することを意味するものではない。こうしたことは可能でもなければ望ましいものでもない。スペインのアナーキストでスペイン内乱の初期（一九三六年十二月）にカタロニアの経済大臣だったディエゴ・アバド・デ・サンチランは、その同志だった人びとを回想している。

「……これを最後にわれわれはもはや……小さなユートピア世界にいるのではないということを認めなければならない。……われわれは局地的な意味でわれわれの経済革命を認めてはならない。局地主義的な基礎での経済は共同私有を生ずるだけのことだ……経済は今日では広汎な組織であり、そしてすべて孤立ということは有害であることを立証しなければならない……。わ

れわれは国全体の、もしできるならば全世界の利害を考えて、社会的な基準をもって働かねばならない……。〈革命後、ニューヨーク、グリンバーグ・パブリッシャー、一九三七年、八五ページ、一〇〇ページ〉

放縦な権力の窒息させるような暴虐と、小地方的愛郷心、社会の小集団や分派の分離主義にみちびく一種の『自治』との間の、貸借対照表がつくられねばならない。リベルテールの組織は社会関係の複雑性を反映し、およぶかぎりのもっとも広い範囲の連帯を推進しなければならない。これは連合と定義することができる。すなわち自由合意を通じての局地的、地域的、全国的、国際的に調整することである。社会生活の全体を包容した、自発的意志による同盟の調整された広汎な一つの網状組織であり、この中ですべての集団や組合が、自分たち自身の分野で変りなく自治を行ない、自分たちの自由の範囲を拡大する一方で、統合されたものとしての利益を増進する。アナーキストの組織原理は分離して存在することではない。自治は非集中化がなくては不可能であり、非集中化は連合なしには不可能である。

社会の複雑性の増加はアナーキズムをさらに一層、そして少なからず近代生活に適合したものになしつつある。アナーキズムの思想家をみちびいて、その思想を力の分散、自治管理、そして連合主義の諸原則に基礎をおくに至らしめるのは、まさしくこの複雑性と多様性、特に自由と人間の価値に関する圧倒的関心である。自由社会の最大の属性は、それが自己規制であり、そして『それ自身の中にそれ自身の再生の種子をもっている』（ブーバー）ということである。自治的組合は十分な柔軟性をもっていて、彼等の中の差異を調整し、彼等の誤謬を正して、それから学び、社会生活の新しい創造的形式を実験し、それによって、より高度な人道主義的平面上で正真正銘な調和を成しとげる。特別な専門集団の限られた立法権に制限された誤謬や衝突は限られた損害を与えるかも知れない。しかし全国民あるいは全世界にまでも影響する国家または他の自動的に集中された組織によって行なわれる誤算の多い、犯罪的な決定は、もっとも悲惨な結果をもたらす可能性がある。

無政府主義的に一層よく組織される近代産業

ブルジョア経済学者、社会学者それに管理者であるピーター・ドラッカー、ガナー・マーダル、ジョン・ケネス・ガルブレイス、ダニエル・ベルなどは、今では広範囲の非集中制を好んでいる。彼等が突然アナーキストになったというのではなく、もともと技術がアナーキズム

的な組織『操作的必然性』を呈示してきたからである。

しかし、ブルジョア改良主義者たちは、こうした組織形体が国家または資本主義に結びつけられている限り、政治的経済権力の独占を伴ない、非集中化や連合制は偽瞞 — 大衆の協力が大衆自身を隷属化する一層有効な手段 — にとどまるということを知らねばならない。彼等の思想が思いがけなくもアナーキズム的な組織の実践を示していること、しかも彼等は彼等自身で矛盾していることについて実例を示すために、『自由企業家』ドラッカーと『福祉国家主義者』マーダルを引用する。『政府の病気』という章でドラッカーは書いている。

「……政府に対する幻滅は国境を越え、思想の境界を越えている。……政府自体が一つの既得利権になった……。政府が何かを企図する瞬間にそれが固定した恒久的なものになる……。非生産性が政治過程自体に内臓されたものになる……。少くとも有意義であるべき社会理論は反射光によって輝くだけの諸惑星に取巻かれる一大中心というよりも、多くの太陽の銀河ともいうべき多元的な制度だという現実から出発しなければならない……。制度の多様性と権力の分散した社会である……多元的社会の組織（それぞれの単位）は社会の成員に対して社会が実施を意図する特定のサービスを行なうことに限られるであろう。— そのうえ、それぞれの制度はそれ自身の分野において権力を持っている以上は、公共の利害に動かされるといったものである筈であり……自治的で制限されたものであるといったような組織の考え方は組織が個人の自由を遂行し、防衛するといった両方を行なうことが必要である……。」（不連続の時代、ニューヨーク、ハーパー・アンド・ロウ社、一九六八年、二一二、二一七、二二二、二二五、二二六、二五一、二五二ページ）。

『政府の怪異、その実行力の欠如、その無力性』を立証したうえで、ドラッカーは自分で見事な自己矛盾を行なって、『このあぶない世界では……この多元的社会組織においては、いまだかつてなかったように、有能な政府が今ほど必要な時はない』といった驚くべき結論に達するのである。

マーダルはソヴィエットも『自由世界の諸国家』も両方とも〈政治生活ならびに経済生活が中央機関の硬直性に屈服しないためには、有効な行政のために非中央集権化が必要であると、説得力のある証明をしている。だが、それから彼は『その日常生活の統制』をゆるめ、そして次第にその権力を『人民自身によって調整される、あらゆる種類の組織と共同体……』に権力の大部分を委譲

する温情主義的福祉国家を期待している。『いかなるアナーキストもマーダルの所論を、彼が彼自身でやる以上に反論することはできないだろう。

「……それがもう必要でなくなっているときに、独裁的なパターンを捨て、行政管理を捨て、そして……すすんで干渉をやめることは、機能的官僚主義の内的作用に相応しない」。（福祉国家を越えて、ニューヘイヴン、エール大学、一九六〇年、一〇二、九七、一〇八ページ）。

こうした非中央集権化と自治の弁護が堅実なものだったとしたら、彼らは権力の分散はアナーキズムにみちびくということを認識するだろう。

『旧い社会の殻の中に新しい社会を形成すること』（IWWの序言）

アナーキストはいつでもジャコバン主義者、ブランキ主義者、ボリシェヴィキその他の独裁主義者と思われる人びとに反対して来た。こうした者たちはブルードンの言葉によれば……「彼等の計算に対する尊重の故に宇宙系をつくり直そうとする天文学者にそっくりで、一つの想像上のプランの上に社会を再建」しようと思っている。（十九世紀における革命の一般概念、ロンドン、フリードム・プレス、一九二三年、九〇ページ）。

アナーキストの理論家たちは、新しい社会を建設するために旧社会のすべての有用な機構を利用することを示唆するだけにとどめている。彼等はすでに実施されている慣例や傾向の総括を想像している。自治、非中央集権および連合主義は、中央集権主義や国家主義に代るべきもっと実際的なものであるという事実そのものが、すでに、現在、社会の機能を行っているこれらの広大な網状組織の機構は、古い破算した過度の中央集権化された管理に、とって代るために準備されているということを予想するものである。『新しい社会の諸要素は、すでに崩壊しつつあるブルジョア社会の中に発達しつつある』（マルクス）ということは、社会主義運動のすべての傾向の者たちによって共有されている基本的原則である。クロポトキンはこの問題に関して非常に率直である。

「アナーキストたちは……現在の時代における生活の観察によって供給された資料にもとづいて、未来の予測を構成する……（革命的パンフレット、一六八ページ）。地区的粗織としての独立コミュンの思想、人びとの組織としての労働組合連合の思想は、それらの異った機能にしたがって、社会革命によって生じた社会の具体的な概念をあたえる。これらの二つの様式の組織に、あ

らゆる可能な、そして想像される必要を満足させるために、いたるところで生長している第三の組織を追加することだけが残されている。……そしてそれらのすべては新しい必要と調整とに適合しようとするものである」。（前掲書一六六—一六七ページ）。

近代の発展を考慮に入れて、総体的に、クロポトキンが概観した考え方は社会の再建のための現実的な基礎を構成するものであることを理解するためには、彼の独自の示唆の全部に同意するまでのことはない。社会は共力的労働の広大な連動的網状組織である。そしてクロポトキンが書いている深く根を張った制度で現在機能しているすべては、人類の存在がこうした内部的な結合によるものであるといった単純な理由で、ある種の形式で機能し続けるだろう。このことは誰もまだ問題にしたことはない。要求されていることは、社会を「通じての」権力的制度から、そして組織そのものの「内部の」権力主義からの解放である。それらは革命的精神と、人びとの創造的能力への信頼を吹きこまなければならない。クロポトキンはアナーキズムの社会学を開発することによって、みのりの多い研究の大道を開いたのである。こうしたことは、いそがしく国家管理の分野での計画作成に従事する社会科学者たちがほとんど見逃して来たことである。

労働者管理に関するアナーキストの主張 — 労働組合のそれぞれの機能にしたがって労働組合による産業の自己管理 — は非常に堅実な根拠を持っている。この傾向はロバート・オーエン、最初の国際労働者協会、イギリスのギルド社会主義運動、および第一次世界大戦前のサンジカリスト運動にさかのぼるものである。ロシア革命では、自然発生的に起った自由ソヴィエト（会議）の形式での労働者管理を目ざす潮流は、最後に一九二一年のクロンシュタットの大虐殺で終止符を打たれた。同じ悲劇的な運命が一九五六年頃のハンガリア人、ポーランド人それに東ドイツ人の蜂起を待ち受けていた。過去に行われたその他の多くの企図の中に一九三六年のスペイン革命の古典的な実例があり、これはリベルテールの農村共同組合と都市産業の労働者管理の実績をもっている。改良主義の『インターナショナル・フード・アンド・アライド・ワーカース・アソシェイション』（国際連合の一翼である国際労働機関加入の全国組合の連合体）の報道誌（一九六四年七月号）の『……労働者管理の要求は「東洋」でも「西洋」でも労働運動において進歩した面での共通の根拠になり得る可能性がある……』という予言が今や事実なのである。

粛清を受けたボリシェヴィキの『左翼日和見主義者』

ではあるが、ヴィクトル・セルゲは革命の初期にロシアを襲った経済危機について述べている。彼の言葉は一般的にいって今でも妥当で、偶然にもクロポトキンの所論を例示している。

「……一部の産業は復活することができるだろうしそして大規模な回復が成し遂げられるのは、国家に締めつけられている共同組合を自由にし、各種の組合が経済活動の各部門の管理を引受けることを奨励して、生産者ならびに消費者の集団の進取性に訴えることによってである。私は、国家による、高い所からの独裁を受けず、下からの総会や特別会議による調整の結果である組合の共産主義に関して ― 国家の共産主義との対照させて ― 論究しているのであった。（革命の追想、ロンドン、オックスフォード大学、一九六三年、一四七・一四八ページ）。

革命後

アナーキストの思想家たちは、革命後の時代に、その根深い偏見や、古い習慣などをすべて、奇蹟的に脱ぎ捨てるような完全な個人の完全な社会の到来を期待するほど単純ではない。彼等はもともと、どこの国でも直面しなければならない社会再建の直接の問題 ― 工業化されているかいないか ― に関心を持っているのである。

こうした問題はいかなる真剣な革命家も無視する権利を持っていない。マラテスタが『……再組織と過渡の期間……（マラテスタ、一〇〇ページ）』と呼んだ時期の間に出顕しそうに思われる緊急問題に適した手段を見出そうと、アナーキストたちが試みたのは、この理由によるものだった。われわれはもっと重要ないくつかの問題についてのマラテスタの所論を概観しよう。（前掲書一五九、三六、一〇三ページ参照）。

きわめて重大な問題は、それを遠い未来に ― 一世紀も、あるいはもっと長く ― アナーキズムが全面的に実現されて、大衆が確信をもった、献身的な無政府共産主義者になってしまうまで、引きのばして回避することはできない。われわれアナーキストは、はるかに現実的で無鉄砲な権力主義者たちが権力をとっている間に、もし無益な、無力な不平屋の役割に後退しているのでなかったら、われわれ自身の解決を持っていなくてはならない。アナーキーであろうと、なかろうと、民衆は食わなければならないし、生活必需品を供給されなければならないのだ。都市は食料供給が行われねばならないし、生活維持のための公共業務が乱されてはならない。公共業務が貧弱になっても、民衆は自分たち自身の利害関係では、

こうした公共業務が一層長いように再組織されないかぎり、そしてされるまでは、こうした業務が混乱されることに対しては、われわれにせよ、他の誰にもせよ許しはしないのだ。そしてこれは一日で成就できないことだ。

無政府共産主義会の大規模な都市化ということは、物質的条件が可能な場合、そして大衆がみずからその有利なことに確信をもつにいたって、さらにその生活方法の合理的変革に次第に心理的に馴れるようになるにしたがって、徐々に成しとげられる外はないのである。自由で自発的な共産主義（アナーキズムのマラテスタ的同義語）は強制されてはならないのだ。マラテスタはいろいろな経済形式すなわち共同組合主義者・相互主義者・個人主義者などの形式が、他を搾取することはないといったことを条件として共存する必要を強調している。マラテスタは確信をもって、リベルテールの成績の良い共同体の実例が「他の者たちを共同体の軌道に引寄せる」であろうと言い「……私としては、社会問題に対して『唯一の』解決があるということは信じない。だが社会的な実存が時と処によって異なるのと同じように、無数の異った、そして変化する解決があるのだ」。（前掲書、九九ページ、一五一ページ）。

『純粋』アナーキズムは架空の物語だ。

『個人主義者』（非常にあいまいな用語）は別にして、アナーキストの思想家は誰一人として『純粋』ではなかった。ジョージ・ウッドコックは説明する。典型的な『純粋』アナーキスト集団は『……ゆるいそして柔軟な気の合う者のグループである』。この集団はいかなる正規の組織も必要とせず、アナーキズムの宣伝を『個人的接触と知的影響といった眼に見えない網状組織』を通じて行なう。ウッドコックは『純粋』アナーキズムはアナルコ・サンジカリズムのような大衆運動とは両立できないと言う。というのは、大衆運動は「安定した組織」を必要とするからである。「あきらかに、アナルコ・サンジカリズムは部分的にしかアナーキズムの理想に支配されていない世界で活動し、……日常の状勢と妥協を行なうからである。……アナーキズムの終局の目的については、ほんのかすかな意識しか持っていない労働者大衆の誠実を維持しなければならないのである。」（アナーキズム、二七三、二七四ページ）。

もし、こうした説明が真実だとしたら、『純粋』アナーキズムは夢物語である。第一に、各人が『純粋』アナーキストになる時は決して来ないだろうし、人類は永久に『日常の状況と妥協』を行わねばならないからである。

第二に、相互に依存し合っている世界の、錯綜した経済的、社会的作業はこうした『安定した組織』がなくては行なえないからである。たとえ住民各自がはっきりしたアナーキストであったとしても、『純粋』アナーキズムは技術的・機能的理由からだけでも、やはり不可能だろうと思われる。このことはアナーキズムが気の合った者たちのグループを除外するということを言っているのではない。アナーキズムは柔軟な多元的な社会を予想するのであり、その社会ではあらゆる人類の必要とするものは、自発的な組合の無限の多種多様性によって供給されるであろう。世界はチェスのクラブからアナーキストの宣伝グループにいたるまで、親近性集団の蜂の巣なのである。そうした諸集団は個々の構成員の変りやすい思いつきによって形成されたり、解体されたり、そしてまた再建されたりする。それはまさしく、こうした集団が自由社会の活力である「個人の優先を反映する」からである。

しかし、すべてのアナーキストはまた、生活必需品や生命維持のための業務が間違いなく提供され、個人的なきまぐれに任されない以上、もし彼が共同生活の利益を享受したいと思うならば、こうした業務は壮健な個人が名誉にかけて遂行すべき社会的「義務」である。こうした必要に答える大規模な組織、連合体、総連合は、当然自由社会の基礎構造である。こうした無政府主義的に組織された安定した共同組織は『常軌を離れたものではない』。こうした組織は『生存を続ける社会秩序としてアナーキズムの本質そのものである』。

『純粋アナーキズムなどというものはありはしない。あるのは社会生活の現実にアナーキズムの原理を適用するということだけだ。アナーキズムが目ざすのは、社会をリベルテールの方向に推進する力を刺戟することだ。アナーキズムの近代生活への適応性が正しく評価され得るのは、この立場からでしかない』。（三浦精一訳）

多元主義アナルコ・ポシビリストたれ！

自由と経験のみが社会の最善の経済形式を決定することができる。―ヴォルテリンヌ・ド・クレール―